

日時：2018年2月21日(水) 18:30～20:30

場所：立教大学池袋キャンパス 16号館3階 第2会議室

## 出席者



中島 俊克 (進行)

全学共通カリキュラム運営センター副部長／経済学部教授



加藤 睦

副総長／体育会長／文学部教授



沼澤 秀雄

全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームメンバー  
(スポーツ人間科学系サポートグループ)／コミュニティ福祉学部教授

## 正課教育を通じて運動習慣を普及する

**中島** この座談会の趣旨は、正課科目についてだけではなく、立教大学のスポーツ教育全体を範囲として現状を踏まえ、大学でスポーツを行う意義について広く考えようというものです。

「大学教育研究フォーラム」は長年発行されてきましたが、スポーツを本題として取り上げるのはおそらく今回が初めてでしょう。逆に、何故これまで取り上げられなかったのかというのも一つの話題ではあると思います。立教大学のスポーツ教育の伝統は深く、とりわけ野球部をはじめとした体育会の活躍は輝かしく、全国レベルの部もかつては多かった。そのように、世間が持つ「スポーツが盛んな立教」というイメージと、学生の意識や大学で実施しているスポーツ教育の間には、相当なギャップがあるのではな

いかと思われま。そこで、伝統ある立教大学のスポーツの裾野を広げ、学生全体に波及させていくにはどうしたらいいのかを考えたいというのが、今回スポーツ教育を座談会のテーマにした意図です。

私にも反省する点があります。グローバル教養人の育成を目的とした新しいカリキュラム「RIKKYO Learning Style」の原案作成には私も参加しました。最初の原案では、「スポーツ実習」は「多彩な学び」と同じように第2ステージ、つまり1年次の秋学期以降に履修できるようにしていたのですが、1年次の初めから履修できるようにしてほしいと関係者から反論が出て、今のようになったのです。スポーツ教育の伝統に気を緩め、意識から抜け落ちてしまっていたのですが、もっと意識的に取り組んでいかないといけないと反省しました。

座談会のメンバーは立場がそれぞれ違いますが、立場を超え、知恵を出し合って、スポーツや身体づくりについての学びをどうしていけばいいか、正課外教育も含め、多角的に考えていきたいと思います。

**沼澤** ではまず私の方から、正課教育の現状についてお話ししたいと思います。旧一般教育課程では、「体育実技」が必修科目になっており、「保健体育講義」と「体育実技」の単位を修得しなければ卒業することができませんでした。「スポーツ実習」と名前を変え、必修から選択科目になったのは全カリがスタートした1997年からです。

スポーツが必修だった当時は、池袋キャンパスにかつて存在していた新学院グラウンドで授業を行っていた時期と、各学部が新座キャンパスで週に1度行っていた時期がありました。

その後、施設はどんどん充実していきました。屋外施設と室内施設を備えた新座キャンパス体育館や、池袋キャンパスにも「PRAC」(ポール・ラッシュ・アスレティック・センター)という施設が加わってからはPRACでの授業が主になってきました。

現在、スポーツ実習は150コマあり、実技中心の「スポーツプログラム」と、実習3分の2、講義3分の1程度の割合で行われる「スポーツスタディ」の2つに分かれています。スポーツプログラムは半期1単位科目、スポーツスタディは半期2単位科目です。

スポーツ種目については、かつてはサッカー、テニスなど一般的なスポーツが多かったのですが、新学院グラウンドがなくなり、場所が不足して小さなスペースで授業を行わなければならない状況が長く続いたこともあり、トレーニングやダンス系の種目が増やされていきました。

夏や春の休業期間を利用し、キャンパス外で集中的に授業を行う「学外集中」のスポーツの科目もいくつか設けており、スキー、キャンプ、馬術など学内では実施できない種目を用意しています。現在、春学期と秋学期各2000人程度の学生がスポーツ実習を履修していて、うち7割～8割が単位を修得しています。

大学4年間のうち、学生全員が1度はスポーツ実習を履修できる程度のコマ数は確保しようという考えでカリキュラムを編成していますが、実態は詳しい調査ができていな

いので、今後調べてみる必要があると思われます。調査の前段階として、スポーツ実習についての学生による授業評価アンケートを2017年度に実施しました。

**加藤** アンケート実施の狙いは何ですか。

**沼澤** アンケートでは、主に学生がどういう意識でスポーツ実習を履修したのか、また授業の良かった点や、悪かった点についての質問項目を設けました。スポーツ施設は概ね揃いつつあるものの、スポーツ実習全体を通して見たとき、学生が不満に感じている点があるかもしれないため、スポーツ実習が学生にどう捉えられているのかを改めて把握しておきたいと考えました。

**中島** 履修の動機についてのアンケートなど、興味深いですね。

**加藤** スポーツ教育を考えるときの柱は2つあると思います。1つ目は、大学がスポーツを課すことで学生に何を提供したいと考えているか、つまり教育上の目的についてです。2つ目は、どういった学生のニーズに大学は応えられているのか、あるいは応えられていないのか、つまり学生の意識調査で、これは非常に貴重ですね。

**沼澤** 教員側からの観点として、スポーツ実習の教育目的を2つに絞っています。1つ目は身体を動かして心身の健康の維持・増進を図るということです。2つ目は、スポーツは言語や国境を超えて築き上げられてきており、文化的な側面もありますので、スポーツ文化に対する学生の理解を促し、スポーツの実践を通じて現代人に必要とされるバランスのとれた理性や、判断力を養成するということです。それら2つの目的を達成するため、スポーツ実習は、単に種目の専門性を身に付けるのではなく、精神性、身体健康、文化的意義、社会関係などとの連携で科目が設定されています。一方、学生側の思いについては、アンケートにより少し見えてきたと考えています。

**加藤** アンケートの結果で、意外だったことはありますか。

**沼澤** 「友人を増やしたい」という回答が少なかった点は意外でした。授業履修の目的で多かったのは、「スポーツが好き」「身体を動かしたい」という回答でした。

**加藤** スポーツが必修から選択科目になり、変わってきた点もあるのでしょうか。

**沼澤** 結構変わってきたのではないのでしょうか。必修科目だった頃は、学生は卒業がかかわってくるのであまり授業を休まないし、教員がよりイニシアチブをとり授業を進める傾向にあったかもしれません。選択科目になって以降、学生のニーズは多様化してき

たように感じます。授業を楽しみたいと考える学生も増えました。また、教員としても、学生にスポーツの楽しさや重要性を理解してもらうために、以前にも増して学生の意見を取り入れるなど、授業を相互的に進めるように変化したように思います。

**中島** つまり必修ではなくなった分、スポーツの先生方は学生を集めなくてはならなくなり、一層頑張って授業に取り組み、その結果、施設も充実し、スポーツ種目も増えたということで、それは一つの成果ですね。

**沼澤** ただし、悩ましい点もあります。選択科目になり、そのスポーツを好きな学生だけが授業を履修してくれるようになれば、授業はスムーズに進むとは思いますが。しかし、教員としては、あまり身体を動かすことが好きではない学生にもスポーツを広めたいと考えているところで、選択になるとスポーツに縁遠い学生はますます履修しなくなる傾向にあり、そこに問題を感じます。

**中島** スポーツが必修ではなくなった現在、一度もスポーツ実習を履修しないで卒業する学生も多くいるかと思えます。また、アンケート結果にも表れていますが、せっかくスポーツの授業を大学で履修しても、それを習慣化できていない学生が多いのが残念です。スポーツによる健康増進や能力開発を実現するためには、履修をきっかけに引き続きスポーツに親しみ、普段からスポーツを行うようになってもらわなければなりません。あるいは、同じ種目でなくても、身体づくりの大切さに目覚め、ウォーキングやランニング、自転車など、何でもいいから日常生活にスポーツを取り入れ、身体を動かす努力をしてほしいわけです。

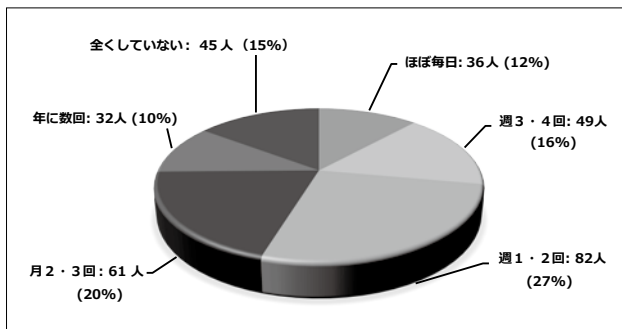
健康維持の重要性に気付いてもらうのは、学生生活を送るうえでもとても重要です。健康維持がうまくいかないと、心身に問題が生じます。そう考えると、やはりスポーツ教育においての目標は、達成半ばと言わざるを得ないでしょう。

**沼澤** 国は、週に1度身体を動かす人の割合を50%以上にすることを目標に掲げています。しかし、今回実施した2017年度の春学期におけるアンケートデータを見ると、授業以外での運動習慣を聞いた質問で「週1度未満」の学生割合が40%を上回ります。このデータには驚きましたね。スポーツ実習を履修している学生でこの結果なので、全学生を対象にデータを取れば、さらに結果は悪化するでしょう。最も健康で、身体がよく動く年代なのにも関わらず、身体を動かす機会が作られていないという実態に大きな疑問を感じています。

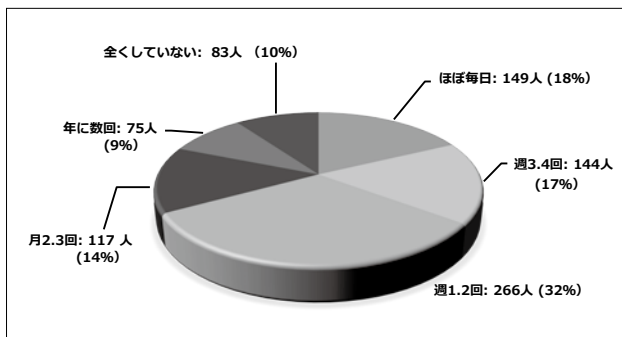
**中島** 全学生のうち、運動に無縁な学生は3分の1から4分の1程度いるのではないかと予想しています。正課教育のみでスポーツを普及していくのには限界がありますので、対外的にスポーツで実績を上げていくなど、課外活動を振興し、かつての立教大学

授業以外での日常生活における運動習慣  
(2017年度スポーツ実習履修者)

春学期



秋学期



※ 2017年度「スポーツ実習」における学生による授業評価アンケート結果より

のように大学全体でスポーツを盛り上げていく必要があるのではないかと考えます。

## 「アスリート選抜入試」がスポーツの普及に成果を上げつつある

加藤 ではここで、正課外教育におけるスポーツの現状についてお話ししたいと思います。まず、立教大学には体育会が52部あり、所属するのは全学生の1割程度だと考えられます。全学生を2万人とすると、体育会に所属する学生は2000人ぐらいで、これは他大学と比較して多いと思います。この理由として、他大学ではいわゆるアスリートを中心に体育会を運営している場合が主であり、スポーツをしたくても、初心者はサークルにしか所属できません。体育会は競技をして勝つための集団であるという性格が強いのですが、立教大学はその点全く異なっています。体育会は課外活動であるという考え方であるため、アスリートも所属しますが、初心者も参加できるということが一つの特徴だと思います。体育会活動を課外活動として捉え直そうという動向が昨今ありますが、立教大学は以前からそれをやっているということで、他大学の方とお話すると褒

められます。

ですから、部には競技初心者も相当数入ってきます。そして、その点が体育会各部の運営上の問題にもなっています。部員達のレベルの違いが大きく、試合に出られない部員も出てくるからです。ただ元々、各部とも人間としての成長を重要な目標としており、競技が全てではないという考え方で活動をしています。そう考えれば、正選手になれない学生がいても構わないのかもしれませんが。

正課外活動には、サークル活動もあります。スポーツ関連のサークル活動も複数あり、大学に登録されているのが39団体（公認団体のみ）で、登録せずに学生が自主的に活動しているものも結構な数があります。

体育会にとっては、部の競技成績を上げていくのも大きな課題のため、「アスリート選抜入試」を2008年度入学者より始めました。かつて、スポーツ推薦を行っていたころの立教大学は「スポーツの雄」でした。いろいろな部が輝かしい成績を収めていた栄光の時代があったのです。ところがある時期から、競技成績のみを優先したスポーツ推薦での入学を大学が認めないようになり、それにともない部の成績にも変化が生じました。私立大学が輝くためには、スポーツの振興も大切であり、新たな入試制度としてアスリート選抜入試をスタートさせたのです。スポーツに優れる人に入学してもらい、知性・感性・身体バランスが取れ、幅広い視野と総合的な判断力を備えた人材育成を目指すための制度です。高校時代にスポーツで活躍した方々を対象とし、入学後は必ず体育会の部活動に参加してもらうことで、部の活性化を狙います。そしてこの制度は、徐々に成果を上げてきていると感じています。例えば、硬式野球部は2017年、東京六大学野球春季リーグ戦で18年ぶりに優勝し、同年、大学野球選手権大会で59年ぶりに日本一に輝きました。受験生にこの制度が一層広まるよう、アスリート選抜入試を続けていくことが大切でしょう。また立教生にもっと立教のスポーツが認知され、スポーツに親しむ学生が増えるよう、正課外活動をさらに盛り上げていきたいと思っています。

**中島** 体育会の、特にアスリート選抜入試で入学した学生がコアになり、そのスポーツを盛り立てていくという方法ですね。他大学と大きく違うのは、アスリート選抜入試で入学した学生を隔離して練習に専念させるのではなく、一般学生と一緒に勉学や練習に励んでもらい、大学を盛り上げていく点でしょうか。

**加藤** そうですね。例えば入学時には保証人の方々にお集まりいただき、学業とスポーツの両立についてお話しさせられたり、授業に出ないで練習している学生がいれば、当然叱ったりなど。さまざまな方法で「文武両道」を達成していきます。

**沼澤** 立教大学では、部活動やサークル活動において“公欠”が一切認められませんので、授業には必ず出席しなければならないという学生の意識は強いです。アスリート選抜入試で入学した学生についても同様で、このルールは他大学に比べるとかなり厳しい

ものです。

**加藤** そうですね。私が学生を指導していて感じるのは、アスリート選抜入試で入学してきた学生は勉強にも熱心だということです。公欠が認められずとも、部活動は円滑に運営されています。ただし、体育会以外、サークルなどの活動状況については十分に把握できておらず、その点は学生の自主性を大切にす校風の表れでもあります。自由なサークル活動の場で、学生が伸び伸びとスポーツに勤しむことでスポーツの楽しさが伝わり、多くの学生たちがスポーツや身体づくりに目覚めてくれればと願います。

**中島** アスリート選抜入試で入学した学生をはじめ、活発な学生はたくさんいるのだから、その良い影響をより全体に広めていく手段はないものかと思うのですが、いかがでしょうか。

**加藤** そうですね。体育会は非常に教育的です。アスリート選抜入試で入学してきた学生たちは一堂に集められ、スポーツと学業を両立するよう厳しく体育会長から指導されます。4年次に上がるときには、主将など部活動の中心的人物に学生を育てるべく、リーダーシップ教育を兼ねた合宿も実施します。つまり、アスリート選抜入試で入学する学生に対しての大学側からの期待は、他の学生の模範になってもらいたいということです。ここに大事なメッセージがあると思います。「スポーツも頑張り、勉強も頑張り」これが立教生としての模範なのだという考えを大学は持っているのではないのでしょうか。アスリート選抜入試で入学した学生たちは、期待どおり頑張ってくれていると思います。スポーツはもとより、留年率を見ても、一般学生たちに全く引けを取りません。

一方で、一般学生の大多数が、アスリート選抜入試にまつわるこうした一連の教育のことを知らない。憧れの対象になってもらおうと促しても、アスリート選抜入試で入学した学生たちの素晴らしさは一般学生にまだまだ広まっておらず、この点は課題です。

例えば、硬式野球部の優勝はすごいことのはずなのに、優勝の翌日にキャンパスに来て、くす玉も花もない。特別扱いたくないことが立教大学の現在の考え方ですね。立教大学には平等主義の文化が色濃く根付いていると感じ、一部変えていく必要があるのではないかと考えています。せっかく輝かしい成績を取めたのだから、もっと目立たせて、学生に知ってもらわないと。

**中島** 戦後の民主教育のなかで平等主義が広がり、その後遺症みたいなものなのでしょうか。個性を伸ばしていくような、現代的な高等教育に合わなくなっている面が制度的にあるかもしれないですね。

**加藤** スポーツを楽しむのは、あるいは観客としてでもいいのですが、応援するという

文化も徐々に廃れてきているように感じます。18年前の東京六大学野球で、優勝が決まる試合では球場を立教の関係者が埋め尽くしました。もちろん学生も大勢来て、ウェーブが起きたほどです。ところが、昨年(2017年)の優勝決定戦には、学生はわずかしか来ていませんでした。これも立教のスポーツ文化衰退の一面です。大事な試合の前には学生に告知して応援に来るよう促すなど、そういった仕掛けも今後必要になってくるのではないのでしょうか。



**中島** 現状では、体育会活動の学生に対する宣伝も、学生の自主性に任されていますね。体育会活動の新聞は発行されているものの、学生自身が配布しています。つまり大学当局は、特定の部への肩入れは民主主義に反するとし、硬式野球部が優勝しても、大学から公式には何も行わないわけです。学生の活動なのだから、大学当局が手を出すべきではないという考え方で、立教の長所でもあります。ただし、立派な選手と一緒に学んでいるのだということを学生に知らせるのは教育的に意味があると、大学を挙げもって意識を高めていかなければなりません。

## 「日本版NCAA」について

**沼澤** 先ほど加藤先生がおっしゃっていた、試合の応援、スポーツを観戦してスポーツへの理解を深めるよう促すのも、これからの大学スポーツを考えていくうえで大きな課題ですね。「見るスポーツ」「支えるスポーツ」をどうするのか。それに関連する話題の一つとして「日本版NCAA」があります。

世界と比較して、日本の高校までのスポーツのレベルは高いのですが、大学以降は伸び悩みます。その現状を踏まえ、スポーツ庁は大学スポーツの振興に向け、日本版NCAA創設の検討を開始しました。アメリカの「NCAA (National Collegiate Athletic Association)」が見本で、大学のスポーツ競技団体を横断する統括組織を作り、学生選手としての地位を守り、収益を生み出し、大学スポーツ全体の発展を支えることが狙いです。

**加藤** 立教大学体育会の各部では、たくさんの物品を要していますが、自主活動なの



で、学生たちが所属する部にお金を納め、これが各部の基本的な運営費となっています。もちろん補助金のシステムはありますが、運営は苦しいです。他大学も同様で、大学スポーツはどうしたら持続可能なのだろうかという問題はどの大学でも起こっていて、各大学でもものすごく悩んでいますね。

**沼澤** とはいえ日本で、アメリカと同じようにお金が回る仕組みを作れるかという疑問です。第一に、日本には人気スポーツが少なく、人気があるといえば、駅伝、野球、ラグビーぐらいでしょうか。ただし、関係者は大学スポーツを盛り上げていくうえで、NCAAやそれに代わる何らかの方法を考えなければならないという気運にはなっています。NCAAは、しっかり単位を修得していなければ試合に出られないシステムになっており、立教のスポーツ教育の在り方に近いと思います。今後、日本版NCAAに賛同するかどうかを立教大学も問われるようになるでしょうし、考えをまとめておく必要があります。

**加藤** 日本版NCAAについては、この制度に賛同するか否か、各大学の考えが重要になってくると思います。また、学連、あるいはそれに類する組織があり、その組織のお金を他の競技活動者に対して広く共有できるかどうかということについても考える必要があります。これまで頑張ってきた組織や効果を上げてきた制度が厳然としてあるわけで、これを新しい制度に組み換えるのはとても大変ではないでしょうか。

**沼澤** いろいろな課題がありながらも、関西の方では具体的にってきているようです。約20の大学が集まり、合同でスポーツイベントを開催するところからスタートさせていくようです。競技スポーツ部門の連携組織「大学スポーツコンソーシアムKANSAI」の立ち上げもこの4月と決まりました。開催イベントには各大学の学生が集まり、観戦も楽しんでいるようです。先ほど加藤先生のお話にもありました「見るスポーツ」の普及にも繋がり、その点については、立教大学でも做うところがあるのではと考えます。

**加藤** そうですね。スポーツは、観戦者が選手と一緒に悔しがったり喜んだり、あるいは選手同士たたえ合ったりして、共に高め合っていけるものです。関西の事例が関東でも実現すれば、大学全体のスポーツ文化がより活性化されていくのではないのでしょうか。1大学だけではなく、さまざまな大学とスポーツの楽しさを共有できる、これも日本版NCAAの制度的価値の一つだと思います。

## 「学び方」を身に付ける場としての大学

**中島** しかし、日本とアメリカのスポーツ教育に関しての違いは激甚です。スポーツで

の人格形成と言いますが、日本には知育偏重の伝統が厳然として残ると感じます。立教大学もそうですが、専門教育で厳しく指導する方向に行きがちで、そうなると身体づくりは疎かになってしまいます。でも、それではきっと駄目なのですよ。先ほどお話ししました4年間1度もスポーツを履修しない学生のなかに、どのような才能が眠っているのかは計り知れません。やはりもっと裾野を広げていかないと、スポーツ界全体の向上が見込めないのではないのでしょうか。クリエイティブな人材の育成という観点からも、多くの学生たちにスポーツや身体作りに目覚めてもらうことが重要です。

**加藤** そのための「RIKKYO Learning Style」でもあるのですよね。専門教育と一般教育、課外活動を全て統合して人間を育てていこうというのが狙いですが、まだまだ知育に偏っていて、知育・徳育・体育のバランスが取れていないと思います。また、アスリートに対する学生たちの敬意が少し足りないように感じ、その点も気になりますね。

**沼澤** スポーツの普及について、文部科学省は「スポーツ立国戦略」のなかで、スポーツを「する人」だけでなく、「観る人」・「支える人」も重視する必要があるとしています。現在立教では、学生部が全ての正課外教育の支援を担っていますが、そうではなく「アスレティックデパートメント」、つまりスポーツ振興のための専門の部署を作り、そこで正課外のアスリートを含め支援していければいいのではないかというのが私の考えです。

**加藤** そうですね。学生部の役割は多岐にわたるため、なかなかスポーツ振興までを担うのは難しそうですね。

**沼澤** 「人生100年時代」と言われ、定年退職後、高齢になっても新たな勉強や趣味を始めるのが当たり前になっていくと推察されます。そこで何が大事かというと、一番は健康だったりするわけです。健康が基盤にあり、かつコミュニケーション能力や自己認識力が備わっていることが、健康寿命のためにも大事だとされています。そういった能力は、まさにスポーツを通じて相手と競い合いながら学べるものです。大学時代は健康なので、なかなか健康寿命のことにまで考えが及ばないものなのでしょうが、積極的にスポーツを履修してもらい、若いうちにスポーツの素晴らしさに気付いてもらいたいものです。

**中島** 「全学共通カリキュラム」開始以降、立教大学のカリキュラムは随分変化してきました。しかしまだまだ詰めが甘いと、改めて痛感しました。これからの大学は、専門知識を詰め込むだけの場ではなく、一生学び続けていくための「学び方」を身に付ける場として機能していくべきではないのでしょうか。学び方には、個性に合った身体づくりの方法ももちろん含まれます。健康が万事のベースになるわけですから。もっと学び

方を教えられるよう、カリキュラムを整えていくことが今後の課題です。

また、立教大学のスポーツ実習は、希望者が定員を超えた場合、抽選で履修者が決定されます。これを改善するために、まずは希望した種目に抽選登録で外れ続けてやる気をなくしてしまう学生を減らさなくてはならないだろうと考えます。例えば、抽選登録に外れた学生や、2年間で一度も履修できなかった学生が優先的に履修できるようにしてはどうでしょうか。スポーツ実習の必修化は難しいとしても、そういうところから始めて、裾野を広げていきたいですね。もう一点、スポーツと学業をきちんと両立させているアスリートの学生たちの存在を際立たせ、一般学生たちに広める一層の努力を大学当局が行っていくべきではないかとも感じました。

**加藤** スポーツを必修科目として履修させれば、学生の主体性が損なわれる部分がある一方、未知との出会いのきっかけにもなり得ます。授業をきっかけに、スポーツの素晴らしさに気付いたり、続けてみようと思ったりするかもしれません。選択科目として学生の主体性に任せると、先入観が邪魔になることがあると思うのです。スポーツが嫌いだと思い込んでいる学生は無縁のままになります。スポーツを選択科目としたまま、スポーツ嫌いの学生にもスポーツを普及するには、体育会の活動がその一翼を担えるのではないかと考えます。広報的効果というのでしょうか。学内のアスリートに憧れて応援に行けば、自分もそのスポーツをやってみたくなるかもしれません。

**沼澤** 少し話がずれるかもしれませんが、教職課程を履修する学生については、スポーツ実習は必修になります。1年次や2年次でスポーツ実習を履修しなかったのに、抽選登録で外れてしまったという学生の声もあるので、今後もう少しコマ数を増やしていった方が良いのではないかと考えます。また、今回アンケートを実施してみたのですが、抽選の結果、男女比に大きな偏りがあるクラスができてしまっているということです。抽選の方法にもう少し工夫があってもいいと思います。

**中島** 抽選の技術面の是正も課題ですね。さらに、正課教育と体育会の交流といいますが、例えばスポーツ実習を履修している学生に対して、その競技の体育会活動の成績や頑張りを伝える仕組みがあればいいですね。

**加藤** スポーツ実習の授業で、体育会のメンバーに模範プレーをしてもらうなど、いろいろ方法がありそうです。

**中島** 各部局それぞれ努力しながら、より連携を取っていくようにしましょう。これまでの話を総括しますと、スポーツないし身体づくりを大学全体に広めていくために、体育会の、特にアスリート選抜入試で入学した学生が全体を引っ張っていくという構図が一つ考えられます。しかし、現状の大学の制度を考えると、困難もあります。理由が



PRACの館名の由来となっているポール・ラッシュ博士\*の写真の背にして

あって存在する制度ですし、そう簡単になくすことはできないでしょう。それでも現代社会の流れのなかで、やはり変えていく部分は大胆に変えていかなくてはならない時期に達しているのではないかと強く感じました。

\* 元立教大学教授。1925年に来日し、日本にアメリカンフットボールを普及させるとともに、戦後のスポーツ復興にも努めた。